

里地通信 9月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋YKビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://www.geic.or.jp/sato/

連載：幹事紹介 現代風篤農家集団



白神山地の調査を行なう瀬田氏

瀬田信哉（せた しんや） （財）自然公園美化管理財団専務理事

田中内閣の昭和49年6月、国土庁が誕生した。僕は国土利用計画や全国総合開発計画の立案に携わるため、環境庁から出向した。設立当初の国土庁では、勉強会と称して100人の有識者から話を聴くことにした。事務次官以下だれでもが聴講し、議論に参加できる。講師は各自が推薦し、講演依頼を交渉する。

僕はまず民俗学者の宮本常一さんの話を、国土庁に

出向してきた中央官庁の官僚達に聴いてもらいたいと考えた。

宮本さんは快諾された。講演の最後には「開発で金儲けをするような総理大臣がいては日本はよくなるまい」と開発行政の本丸を楯を飛ばされた。それは番外としても、本当に全国津々浦々を愛情を持って歩いておられると感じ入った。その時の話が『里地ネットワーク』にぴったりという気がするので、さわりを紹介する。

「私は篤農家とよばれる種の間人で、戦前戦後を通じて農業の指導を行ってきた。篤農家というのは、業を

同じくする者が連帯感をもって農業に精励するという、素朴な気概を有していた。彼らは、その土地土地での気象や地味と作物の品種がどのように馴染むかを、実践を通して百姓と共に考え、全国行脚もした。単に農業技術に優れているというだけでなく、経営・経世の才にも優れ利益を自己に帰することなく、農民の向上の意欲を引き出し、農村の未来を信じた素手の人たちであった。

ところが農業改良普及員が制度化され、農業経営指導も農協に任せるといった権力構造のヒエラルキーをもった組織的な農業機構ができあがり、技術も合理的手法を奨励するためと称し、補助金や行政指導によってそのルート上にある官僚や学者からの一律のノウハウを提供してきたために、在野の篤農家は姿を消していった」

今様の地域活性化や地域開発もこの状態に似ていないだろうか。中央官庁やそれに繋がるコンサルタントが小賢しく構想しては、計画と実現のための補助金を交付する。

地域も情報化に遅れまじと、事例の検索をし、見聞してはそれに習おうとする。文字面ではなく、行間を読むようにじっくりとその土地の地味を味わえるような人が現れないからだ。そのような情熱と知恵と手足を持つ人やそんな人が活躍する地域を尋ね探してネットワーク化することが今は必要なのだ。里地ネットワークはそんな現代風篤農家集団を模索している。

書籍紹介

国立公園の町づくり『アメニティを考える』未来社
自然保護論『地球環境経済論』(共著)慶応通信

経歴

1938年大阪生まれ、61年北海道大学農学部卒業後、厚生省国立公園部(レンジャーとして阿寒、南アルプス、中部山岳に勤務)、92年環境庁審議官を退官、現在(財)自然公園美化管理財団専務理事、観光政策審議会委員、国土庁農村整備懇談会委員

お知らせ

ご希望の資料をお送りします。

里地セミナーやシンポジウム等の資料や記録をご希望の方は、以下のものを添えて事務局に申し出てください。できる限りの資料をまとめてご送付します。

資料請求に必要なもの

・角2封筒...お届け先住所、お名前を明記してください。切手を貼る必要はありません。

・メモ...希望する資料の内容(セミナー名、日時、講師名など)と連絡先(電話)、ご担当者名を記入してください。

・切手...手数料・郵送料として会員は1回500円、一般の方は1回1,000円を承ります。相当分の切手を同封ください。

来月号は10月上旬頃に発行します

環境保全型里地づくり事例調査報告

Let's地元学

「水の行方とあるもの探しをしよう」 ～ 愛知県美浜町における地元学の実践～

フィールドで「あるものさがし」

里地ネットワークでは本年度調査事業とシンポジウムをいくつか計画していますが、愛知県美浜町における「地元学による地域資源マップづくり」がスタートしました。今回はその第1回（7月30～8月1日）の調査報告です。

今回は、地域の風土と暮らしを知るために、熊本県水俣市で「地元学」（通信6月号参照）を提唱されている吉本哲郎氏から「地元学」のレクチャーを受けて、美浜における地元学を実践が行ないました。

美浜町

知多半島の先端近くに位置する、温暖な地域。名古屋から車で1時間という距離にあるため、都市化の波が迫っていますが、現在もなお里山の自然が多く残されています。

里地ネットワークの幹事でもある齋藤町長は「ふるさと研究むら」構想を唱え「自然との共生、そして心」を大切にしたい町づくりを目指しています。

地元学のきっかけ

2年前、美浜町布土地区のあるグループが「私の地元学」という本に出会い、著者である吉本哲郎さんを講師として招き勉強会を行ないました。里地ネットワークと過去の勉強会が重なり、今回の調査が始まりました。

なぜ地元学か？

吉本氏による「地元学」レクチャーの一部を紹介します。地元学についてももう一度確認しておきましょう。「本当に住んでいる地域や町を知っているのだろうか？」



「何も知らないで地域おこしや町おこしをやろうとしていないだろうか？」

この問いかけを、よくよく考えてみてください。

地元学を通じた地域調査から、今まで見えなかった事が徐々に見えてくるようになります。それを、生活づくり、地域づくりへと展開していくことが大切です。環境や産業に対しても視点を置きつつ、「生活づくり」すなわち生活の充足を考えていく事が良い地域への変革のポイントです。

例えば、使い方（ソフト）を考えてから、上モノ（ハード）の作り方を検討する順序でなくてはならないのです。

今回の調査で行なうことは、風土（自然）と暮らしの把握です。

まず、風土の点からは生活になくはない水から調べていくことになります。

これが、「水のゆくえ」です。人だけでなく多くの生命基盤を育てている水がどこから来ているのか、それを自覚することから始まります。

暮らしの把握では、地域にあるものを改めて発見していくことです。

とにかくあるものに気づいたことをなんでも地図に記入したり、写真にとって地図に貼ったりして、わいわいと疑問を出し合って発見していく作業です。これが、「あるもの探し」で、くらしの確認になります。

ここでも専門学者ではなく生活者の視点で調べていくことが重要となります。

また、地元の方の言葉で表現して語っていくことが大切です。

調査の手順

- ・「地元学」レクチャー
(地元学協会事務局長 水俣市役所 吉本哲郎氏)
- ・布土地区にて地元学、地域資源調査実施
「水のゆくえとあるもの探し」
- ・役場にて資源マップの作成
- ・杉浦さん(布土地区住民・農家)の家の
あるもの探し
- ・役場にて水のゆくえ、資源マップ等の作成、
資料まとめ作業



フィールド調査後、みんなで資料マップに書き込みます

地域資源調査の方法

モデル地域：美浜町布土地区(布土川を中心に)

調査班：町職員、布土住民、外部スタッフの混成
チーム 3～4チーム

調査内容：「水のゆくえ」「あるもの探し」
「杉浦さんの家のあるもの探し」

調査概略：布土地区の白地図と各種色鉛筆、
記録用カメラを班ごとに準備
布土地区分水嶺の内側にある布土川周
辺を重点調査区域に設定
布土川上流域でフィールド調査のレク

チャー受講

班ごとに調査内容と調査区域を設定、
フィールド調査、記録

杉浦さん宅訪問、全員で「あるもの探
し」実施、記録

記録の整理、地域資源マップの作成、
地域資源情報カード作成

次回の調整

「水のゆくえ」から(抜粋)

- ・半島先端に近く丘陵地であるため河川も短く、昔から水に苦労してきた土地柄。昔は深井戸や雨水を生活用水に、数多くのため池を農業用水に活用。
- ・ため池が最上流部に位置し、水田がその下流に広がっていることが昔の地図から判明。
- ・現在は、美浜町の飲み水や農業用水は愛知用水に依存し、ため池の役割も少ない。
また、水田における水も田からの排水は再び活用されることも少なく川へ流される。
水の使用に際する意識の変化が生じている。
- ・生活にかかせない水のゆくえを追うと、美浜町の生命線は木曾川・長良川に行き着く。
- ・布土川の南川の谷地沿いで湧水がいくつか見られる。

「あるもの探し」から(抜粋)

- ・ドライフラワー作り、野の花に詳しい人がいた
- ・ホテルがけっこういた
- ・とんぼが谷地にいる
- ・夏の花が意外に多い
- ・強い北風を防ぐために家の西側には壁、窓があっても二重窓になっていた
- ・泳いでいる地元の人がない
- ・黒松がのこっていた
- ・大きな銀杏の木があった
- ・山桃の木は農作業の合間の木陰を提供していた
- ・竹は、モウソウ、真竹、根竹、芽竹、ホテイ竹などがあつたが、食べていない様だった
- ・布土公民館は、なんとなく皆があつまって、おしゃべりをするところだった
- ・神明社の植生が一番すごい。ここを調べれば、すべてがわかる。もとの樹林(極相林)がわかる。

- ・各谷地沿いの斜面林が面積として一番多く、若い混交林
- ・カワウの集中
照葉樹、竹林などてっぺんの樹形がおかしいもの、枯れなど、カワウの営巣等により少々バランスが崩れている。しかし、全体の緑地が多いので許容。

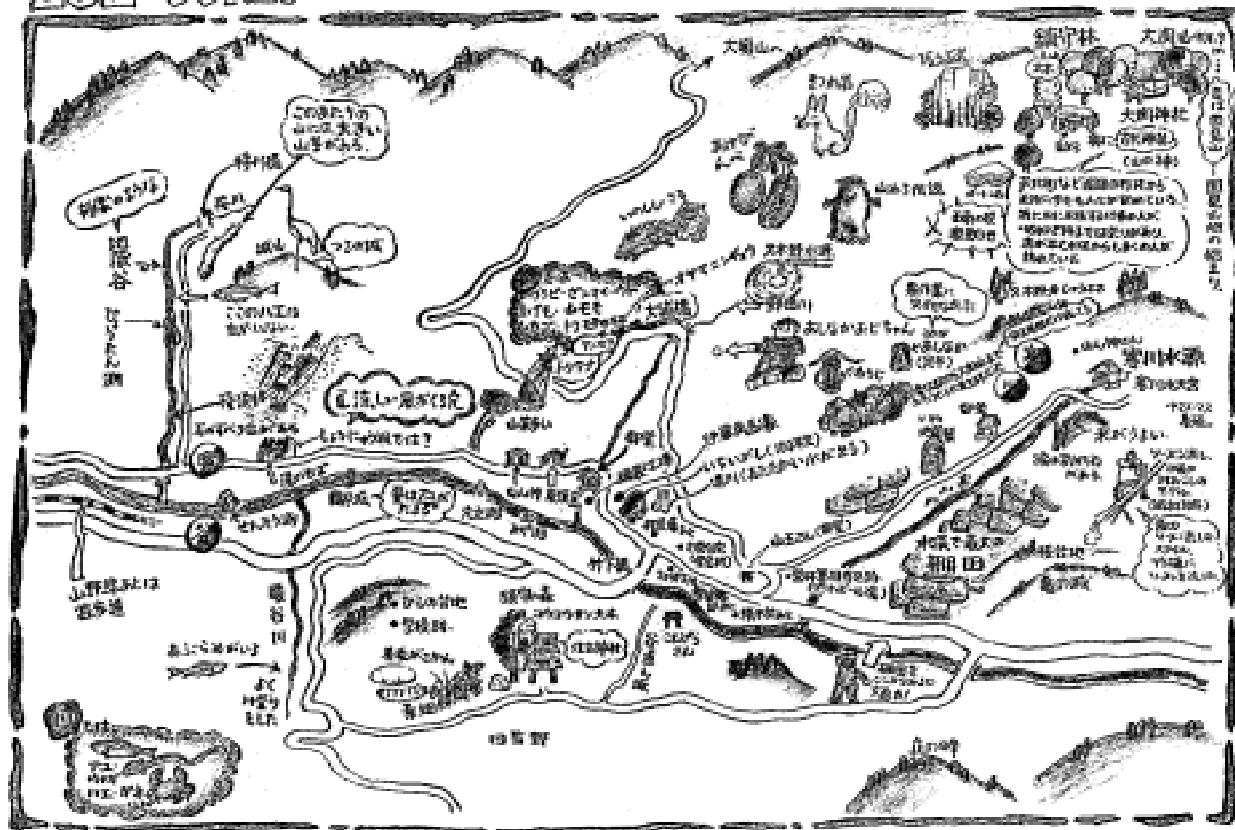
今後の調査予定

- ・地図上に愛知用水の流れを記入
(布土地区及び愛知県全図)
- ・「あるモノ探し」地域資源情報カードづくり
(分類、キーワード記入)

- ・地元の人による地区の写真撮影
(食べ物ごよみ、花ごよみなどの作成資料)
- ・杉浦さん宅の徹底的な資源調査
- ・風をキーワードにした資源調査
- ・「つなぐ、重ねる、はいでいく」そして考える

今回をきっかけにさらに調査を深めていき、9月末にはその中間発表とさらなる調査、12月6日には、作られたマップの発表と、この布土地区での調査を踏まえてこれから美浜をいかにつくっていくかの公開討論会、を行う予定です。

23区 久木野



水俣地域人材資源マップ集「寄り会みなまた編」より
資料マップを元書き起こした例として。次ページからのエコ水俣ツアー報告も合わせてご覧ください。

環境保全型里地づくり 調査及びシンポジウム 熊本県水俣市におけるツーリズムの 調査の実施について

里地ネットワークでは、熊本県地域計画総室、水俣市と、会員である(財)水俣病センター相思社、幹事であるリクルート(株)とのパートナーシップにより以下の企画を立案し、ツーリズム開発を実施することになりました。残念ながら、モニターツアーであるため会員の一般参加はむずかしいのですが、実施概要をお伝えしておきます。なお、シンポジウム(公開討論会)へは一般参加が可能です。

テーマ：エコ水俣フィールドツアー

環境再生水俣・生活文化体験 (仮称)

主旨：

三方を山に囲まれ 一方を海に開いた水俣は
ひとつの小宇宙
人々は海の民 野の民 山の民
そして マチの民に分かれて
水の恵みに暮らしています
人だけでなく多くの生命を育む 水の恵み
海と山を結ぶ川 自然と暮らしをつなぐ水から
水俣は再生します

モノや地域、そして生活づくりの背景にある地域固有の風土と生活文化の厚み、源流域から不知火の海に注ぐまで水俣を流れる水俣川、リアスの入り江と森の恵みは不知火でも有数の藻場を育て、人々は野山や川、海の幸に暮らしていました。

そこに発生した世界に類例のない産業公害である水俣病は、海や魚を汚染し、人の健康だけでなく生命を奪いました。発生から40有余年、ようやく公害防止事業の実施、被害者の救済が進み、今、水俣は再生へと旅立っています。

水俣病の教訓に学び、環境と地域の暮らしのありようを考え、行動している水俣は、環境と共に生きる暮らしづくりの先進地に生まれ変わりつつあります。様々な水俣に学んだ人々の存在がそこにあります。

環境再生水俣・生活文化体験ツアーは、私たち自身が、水俣の経験と風土に根ざした生活づくり、モノづくり、地域づくりを、ツアーを通じて体験することにより、暮らしをみつめ直すきっかけとなることを願っています。

趣旨ご理解の上、ご参加いただければと思います。

- ・チッソ、水俣病患者、水俣病センター相思社、水俣住民、行政による40年の歩みと和解
- ・再生する水俣、水俣市の先進的な環境政策、資源の活用、ISO14001...
- ・暮らしを掘り下げる「水俣地域資源マップ」「水の経路図」「水俣地域人材マップ」
- ・環境ツーリズム、エコツーリズム、グリーンツーリズム、小グループ修学旅行への展開
- ・新しい水俣へ訪れてくれるファンづくりであり、将来の水俣定住予備軍をつくる足がかり。

水俣の人々の暮らしを体験することで、私たちの生き方を見詰め直したいと思います。

再生する水俣から学び、環境共生水俣を広く伝えましょう。

ツアーの特徴：

- ・水俣の魅力、再生する水俣、新しい水俣を知ってもらう。

- ・第1日目は水俣モニターツアーのオリエンテーションを行なう。
- ・グリーンツーリズムの手法で提供する。
- ・一過性の観光旅行ではなく、生活を実感でき、水俣のファンとなってもらう。
- ・特別のプログラムではなく、比較的安価でだれでもが経験できるコース設定。
- ・自然、人、モノ、場所、時間を楽しむ余裕とまなざしを共有する。
- ・水俣病を経験した水俣の、水、ごみ、食べ物への取り組みを紹介。
- ・人を束にして扱わず、個を大切にする。

- ・モニター参加者の感動（驚き、喜び、我を忘れる、生活実感）がキーワード。
- ・メニューは詰め込まずゆったりした時間を過ごす。
- ・食事はできるだけ水俣の人が日常・ハレの日に食べているものにする。
- ・夜なべ談義は調査や相談ではないので、なごやかな語りの時間とする。
- ・企画是水俣ツアーとして提供が将来可能な内容を基本とする。
- ・一般参加者には水俣のファンになってもらったり、将来の定住予備軍となるようなものとする。

環境再生水俣・生活文化体験ツアー

期日 1998年10月2日（金）～4日（日）
 人員 モニタツアー参加者22人＋一般参加者8人

1日目

- 10:00～ 東京（羽田） 鹿児島空港
 12:00～13:30 水俣へ 車中で食事
 （月の浦農産加工グループの弁当）
 （水俣の略史、水俣病事件史、再生する水俣の取り組み紹介）
 13:30～15:00 水俣病資料館見学・水俣湾埋立地・チッソ工場をまわりから見学
 15:00～16:10 暮らしの現場で水俣病の語り部の話を聞く（杉本栄子さん）
 16:30～17:30 ごみ分別収集の見学
 18:30～20:30 夕食交流会：福田農場にて
 宿泊：湯の児温泉（翌日AとBとCコース）
 湯の鶴温泉（翌日Dコース）

2日目

- 09:00～17:00 4コースに分かれて水俣を堪能する
 17:00～19:00 休憩&夕食
 19:00～21:00 夜なべ懇談会

A：水巡りコース「水が作り出す風土と暮らし」
 （湯の児温泉から石飛）

コース概要：湯の児、仁王木の用水路、市渡瀬の丸石の井堰、薄原の水巡り、石飛湿地散策、釣り、紅茶作り、ダイゴロで遊ぶ
 夜なべ談義：石飛村おこし会（於：石飛分校）
 案内人：天野茂、補佐：吉本哲郎
 昼食：薄原農産加工場、夕食：天野さんの家庭料理
 宿泊：天野宿（リサイクル手作り）か、湯の鶴温泉



「水のある風景水俣」より

B：海巡りコース「海のある暮らし」

(湯の児温泉から湯の鶴温泉)

コース概要：湯の児(伝説、あわび養殖の話、ガラカブ釣り) 船にて移動、恋路島探訪、茂道、グリーンスポーツ散策

夜なべ談義：水俣の漁師の人々(於：湯の鶴温泉旅館)

案内人：杉本肇、補佐：小里アリス

昼食：杉本家、夕食：湯の鶴温泉

宿泊：湯の鶴温泉

C：久木野コース「山の暮らし」

(湯の児温泉から久木野へ)

コース概要：湯の児、寒川水源で水を飲む、棚田を見る、日当野を歩く、木を切る。5ページイラストマップをご覧ください。

案内人：沢畑亨、補佐：遠藤邦夫

夜なべ談義：地元の人たち、愛林館女性グループ

(於：愛林館)

昼食：水源亭、夕食：愛林館

宿泊：愛林館もしくは湯の鶴温泉

D：湯の鶴コース「湯治場を拓く」

(湯の鶴温泉から湯の鶴温泉)

コース概要：七滝巡り、薬草摘み、稲刈り、湯の鶴散策

夜なべ談義：湯の鶴寄る会(於：温泉センター)

案内人：振興会、補佐：奥園惣幸

昼食：野外弁当、夕食：湯の鶴温泉

宿泊：湯の鶴温泉

3日目

09:30～12:30 水俣里地づくりシンポジウム

(もやい館)

テーマ：新しい旅の形、水俣の可能性

司会：里地ネットワーク

話題提供者：市長、各グループ報告者

09:30～10:30 シンポの進め方、話題提供者1人10分

10:30～11:20 参加者感想、意見交換(割り込みあり)

11:20～11:30 休憩

11:30～12:30 まとめ

12:30～13:30 昼食：もやい館

(薄原農産加工グループの弁当)

イベント・募集案内

飯山市小菅の里ふるさとづくり

人の手を加わえることで多様な生物が生息している里山。この里山管理作業として、カタクリの里山下刈り、アジサイ苗の植え込みなどを行ないます。

期間：10月24日(土)～25日(日)

場所：長野県飯山市

連絡先：0269-65-3558

(小菅むらづくり委員会 真島一徳)

キープ協会 ポール・ラッシュ祭

～八ヶ岳カンティフェア～

ケンタッキー出身ポール・ラッシュ博士の来清50周年を記念して1988年から始まり、回を重ねる毎に参加者が増えている収穫感謝祭。ポニーの草競馬、草原のプラスチックフェスティバル、ギターコンサート等、楽しいイベント盛りだくさんです。

期間：10月17日(土)～18日(日)

場所：山梨県高根町清里キープ協会 清泉寮前牧草地

連絡先：0551-48-2114(キープ協会企画室 山本)

ゆうど 南の海の森から

～城間光雄の世界～

南の森の本物の野生の自然林から伐り出された堅木を材として用いている城間氏。10月の今井俊博氏による里地セミナーの会場となっている使い手とつくり手の出会いの場としてのshop & ギャラリー「ゆうど」で城間氏の作品の展示会が行われています。

期間：9月10日(木)～23日(水) 11:00～19:00

場所：ゆうど(東京都新宿区下落合3-20-21

JR目白駅から徒歩5分)

連絡先：03-5996-6151(ゆうど)

事務局日記 98年8月

8月12日

長野県飯山市役所

小菅むらづくり委員会

飯山市では、森の家、小菅の里づくり、住民による温泉施設の整備、民家のそば屋さん、民家のコーヒーショップ等、さまざまな生活者による村づくりが行なわれています。森の家では、飯山市民を先生とするフィールド体験やセミナーが毎週のように行われていたり、小菅の里では、小菅神社と参道及び北竜湖を核とした集落全体での文化財の保全、まつりを始めとする伝統文化の伝承、エコパーク、ピオトープづくりを、集落、飯山市、都市への呼び掛けのもと実施していました。

8月20日～22日

熊本県水俣市

熊本県庁、水俣病センター相思社、リクルート、里地ネットワークの合同会議を行いました。再生する水俣、

水の恵みを受けてくらす水俣の人々の生活、水俣病という経験に学び、環境共生の先進地となった水俣。この水俣を、環境と共生した生活と文化を、私たちが学べるように、ツーリズムの検証を行いました。詳細は、実施企画案をご覧ください。

8月28日～30日

秋田県二ツ井町 森の学校

2年前から実施されていた「森で遊び林業を考える学校」に参加しました。実は、里地ネットワークが設立される前に、私（竹田）が、ジャパンエコロジーセンターの担当であった頃、企画立案実施したもので、前職の退職により、どうなるか心配していた企画でした。しかしながら、二ツ井町が自ら、町の行事として実施することとなり、地域化していくことの喜びを感じています。里地ネットワークでは、当初のコンセプトである林業振興を図るため今後ともサポートしていく予定です。次回の森の学校は、冬に予定されています。詳細は、別途ご案内いたします。（以上、竹田）

8月10～24日

国際ワークキャンプin大宮に参加

原田和央は事務局を抜け出し（決して逃げ出した訳ではなく）、国際ワークキャンプに参加してきました。この国際ワークキャンプは、世界中の若者が集まって2～3週間、ある地域で共同生活を行いながら、地域の人たちと環境・福祉などのワーク（地域活動）を行なうプログラムです。第一次世界大戦後、ドイツとフランスの若者が一緒に農地再建をしたのに始まり、現在世界84カ国、2000カ所で開催されています。

国内では、NICEという国際ワークキャンプ日本事務局が1990年に設立され、今夏は北海道から九州まで、全国約20カ所で開催されました。

その中の一つ、三重県度会郡大宮町での国際ワークキャンプは今夏で4回目の開催。96年に町内の林業家とNICEとの共催で始まり、「より多くの住民との開催を」ということで、2年目からは町との共催。町内



石運びをしながら、中学生とのコミュニケーション

の88%は山林、県立自然公園地域であるというこの大宮町で、『大宮町の豊かな自然環境を活かした地域づくり』を目指しています。外部のNICE参加者だけで地域活動を行っても意味がないので、様々なプログラムを通して住民の方と共にワークキャンプを創って



夏祭りでは、無(?)国籍屋台を開いた



「シェフ」に従い、みんなで料理

います。なかなか理解し難いところも多いのですが、数を重ねる毎に新たなネットワーク・関係が作られています。

今回はキャンプ場内の小川での蛍の里づくりを中心に、公園の花壇の草取り、夏祭りでの盆踊りや夜店などへの参加、住民の家庭に受け入れていただくホームステイ、自分の国での様々な取組や大宮町への提案を発表する座談会、国際ワークキャンプ開催を周辺地域にアピールする体験ツアーなど、2週間の内に盛りだくさんのプログラムでした。

今回はイタリア、フランス、イギリス、ドイツ、スイス、ベルギー、セルビア、アメリカ、そして日本各地の9カ国、18~49歳まで23人の精神的(?)若者が大宮町に集結し、町内の公共施設で自炊をしながらの共同生活。

2週間とはいえ9つの文化圏、気候風土から食生活まで様々です。ましてや23人も人が集まれば多様。文化の違いなのか、各自の個性なのか、まるでおもちゃ箱のよう。私はこのおもちゃ箱が壊れるんじゃないかと、はらはらしていましたが、いざという時にはみんなきちんと収まります。

ちなみに、日本人は1週間の部分参加者以外はみんな学生。外国人は半分くらいが社会人。この違いも文化なのであるのか...と考えてしまいました。

キャンプ内での公用語は基本的には英語。しかし日本

をはじめ英語圏外の参加者達は一苦勞。日本語はもちろんイタリア語、フランス語など様々な言葉が飛び交い、身振り手振りによるコミュニケーション。楽しさは踊ってしまえば通じますし、難しい話もみんなでお互いに理解しようと協力します。ワークを手伝ってくれた地元の中学生もはじめは全くコミュニケーションがとれませんでした。慣れてくればワークや水かけっこによるコミュニケーションなど、言葉を使わない方法を見いだしていました。

言葉や国を越えて越えて得る新しい価値観、そして温かい地元の人との交流...。国際ワークキャンプという一つのプログラムを通じて、参加者は大宮という地域を、地域の方々は多様な文化を、知ることになります。日本人参加者のなかには、参加前は単に国際交流を求めて参加する人もいますが、参加した後は、参加地域の様々な活動を展開している人からの話、抱えている問題など、逆に日本のことを知り、考えるようになることも多いようです。(そんな訳で私はこの国際ワークキャンプへの参加を気がいたら7回もしていた...)

この国際ワークキャンプは各地域でどのように受け入れられ発展するのは、様々で測りきれません。それだけに私は国際ワークキャンプの可能性はたくさんあるのではないかと考えています。

(原田)

里地セミナーご案内と募集

「地域はどうすれば活性化するか」

日時：9月18日（金）13:30～16:30
場所：ネスパス新潟館（東京都渋谷区）
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：農林水産省農業研究センター
農学博士 長谷山俊郎

むらづくりや地域おこしには、地域の人たちの活力向上が重要である。地域の人たちは、何がどう作用した時に意識が変わり、行動が生まれ、それらによって、地域はいかに活力を高めてくるか。このセミナーにおける話の内容は、事例の積み重ね（研究）にもとづいて得た、地域の人たちの活力向上過程の明確化と、地域活力向上の方策の提示にある。

その場合、大切なのが、地域の人たちの「共通目標」の有無であり、同時に「共通目標」にもとづいて活動する中で出てくる「効力感」（＝自分や自分たちが行ったことがまわりになんらかの影響を与えているという実感）を、持ち得る活動になっているかという点である。誰でも、自分たちがやっていることがまわりに注目されているという実感を持った時、元気になる。従って、そうしたものが得られる活動になるように、地域の「変化づくり」方法、内発的意欲の引き出させ方、リーダー活動の心得、組織活動のあり方、主体性の育て方、活力向上の方策、などについて、事例もまじえて話す。

「外部参入者（インハビタント）と地域活性効果について」

日時：9月19日（土）10:00～13:00
場所：ネスパス新潟館（東京都渋谷区）
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：鳥取県智頭町役場・
とっとり政策総合研究所センター 河原利和

本セミナーでは、中山間地域におけるコミュニティ活性化の向上に外部者の参入と関与が一つの有効な糸口を提供し得ることを、特に、熊本県小国町のケーススタディに即して実証したことを紹介する。その際、この種の外部者の重要性は単に頭数にあるのではなく、むしろそれぞれの「かけがえのなさ」や「個性・多様性」に裏付けされた地域社会への影響の質的側面に注目すべきであることを指摘した。これらの実証的な事実を踏まえて、地域コミュニティの人々とコミュニケーションを維持し、何らかの影響を与える外部参入者を「ハビタント」として一般的に概念化することを提唱した。

この定義にあてはめることにより、実証分析により確認された各々の外部参入者を「ハビタント」と、言い換えることができることを指摘した。その上で、「ハビタント」概念の明確化と分類についても検討した。さらに、「ハビタント」の参入の促進を図る上で、内部と外部の人・物・金・情報の面でのチューニング・チャンネル機構の重要性とその機能的要件についても実証的分析を行った。最後に、「ハビタント」概念が中山間地域におけるコミュニティ活力の向上等を図る上で、有効な観点を提供し得ることを明らかにした。

申込みは、別紙 『参加申込書・連絡票』をご利用ください。
開催場所の地図は、次ページにあります。

里地セミナー今後の予定

「風・水・土とモンスーンアジアの文化を見つめる」

日時：調整中
場所：ゆうど（東京都豊島区）
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：ユーラシアクリエイティブジャパン代表
今井俊博

「環境保全型の技術について」

日時：調整中
場所：未定
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：京都大学教授 内藤正明
日刊工業新聞 駒橋編集委員

「日本の民族文化を伝承する」

日時：調整中
場所：民族映像研究所（東京都新宿区）
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：民族文化映像研究所長 姫田忠義

「環境土木技術について」

日時：調整中
場所：未定
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：西日本科学研究所 代表取締役 福留脩文

9月18日、19日の会場

ネスパス新潟館 東京都渋谷区神宮前4-11-7 表参道
(地下鉄表参道駅、JR原宿駅)

